

法華宗とは・・・



法華宗は、法華経に基づいて信心をすすめ、この世の中に真の幸福な世界を築くことを目的としています。

法華宗は、はるか遠い昔からの釈尊のご信仰を受け継いだ、宗祖日蓮大聖人の教えを、そのまま今に伝える唯一の宗旨です。

法華宗は、日本歴史の上では、建長五年（一二五三）四月二八日に、日蓮大聖人がはじめて「なむみょうほうれんげきょう」と唱えられたときに始まります。

法華宗は、日蓮大聖人の唱えられたように「なむみょうほうれんげきょう」というお題目を聞き、信じ、口唱し、多くの人々の心に、仏になるための種子を植えていくことを信心の生活の根本としています。



〔宗名〕

法華宗。これは、日蓮大聖人ご自身が、「法華宗の沙門日蓮」と、自ら名乗られたそのままでの宗名です。

〔宗祖〕

日蓮大聖人（一一二二—一一八二）。宗祖とは、一宗を開いた祖師の意ですが、ここでは、単なる一宗派の開祖という意味ではなく、末法という人も心もともに荒廃した時代の人々を救うために、釈尊より遣わされた上行菩薩が、人間として生まれてこられた方、すなわち末法の人々を導く尊い指導者という意味です。

〔本尊〕

本尊とは、信心の対象として、もつとも尊いものの意です。

私たちの本尊は、「ほんもんはつぽん じょうぎようしよでんの なむみようほうれんげきよう」です。この「なむみようほうれんげきよう」は、一切衆生を成仏させるための根本の種子であり、宇宙すべての功德を納めており、今日のような荒廃した時代のために釈尊が上行菩薩に託された教えであります。そして、釈尊も宗祖もこれを本尊とされました。

この「南無なむみようほうれんげき蓮華よう」の功徳くどくのありさまを、
仏様ぼつさまや菩薩ぼさつ様の姿すがたとして、日蓮大聖人にちれんだいしょうにんによつて、わかりやすく示しめされたものが、十界じゅうかいの大曼荼羅だいまんだらであり、私わたしたちはそれを仏壇ぶつだんの正面しょうめんにお掛けかしておがみます。

【経典きょうてん】

法華宗ほけしゅうは、法華経ほけきょう（妙法蓮華経みょうほうれんげききょう）をよりどころの経典きょうてんとしています。日蓮大聖人にちれんだいしょうにんは、このお経おきょうは、釈尊しゃくそん滅後めつご（末法まつぽう）の人々ひとびとを救すくうための教えおしであり、この経きょうこそ釈尊しゃくそんの真意まごころを説とく経きょうであるとされました。言こといかなれば、釈尊しゃくそんはこのお経おきょうを説とくために、この世よにお生うまれになったのです。ですから、この法華経ほけきょうは、今のわたしたちを救すくうための教えおしであるのです。

【お題目だいもくとは】

法華経ほけきょうの経題きょうだいをさすところから出たことばですが、いまは、
本ほん門もん八はち品ひん「ほんもんはつぽん じょうぎじょうしよでんの なむみようほうれんげき法蓮華よう」をいいます。宗祖しゅうそは、釈尊しゃくそんもあらゆる仏様ほとけさま



もこのお題目の信心・修行によって仏になられたとされていきます。すなわち、このお題目は成仏するための唯一の種子であり、成仏するのに必要なすべての功德を納めている教えなのです。ですから、宗祖はこれを「母乳」に譬えられ、赤子が母に抱かれて口に乳を含むとき、何も考えずとも自然に成長することに譬えられました。

お題目は、決して、抽象的な真理とか法理とかいうものではなく、人間の心を育て向上させるための、生命力あふれる、慈悲そのものの教え、功德のあつまりなのです。

◎他宗のお題目との違い

宗祖のお唱えになったお題目は、「ほんもんはつぼんじょうぎようしよでん」のなむみようほうれんげきよう」です。このお題目こそ、聞き、信じ、唱えて功德のあるお題目なのです。しかし、宗祖が亡くなられて以後、長い歴史の間に「なむみようほうれんげきようは法華経の真理を指す」ことのみが強調され、「お題目は真理そのものである」という解釈が重視されるなど、純粹のお題目でなく、濁りが生じるようになりました。そこで、それらと区別し、本来の宗祖のお題目であることを明確にするために、「本門八品 上行所伝」と但し書きを付けざるを得ないようになりました。

「真理」とは悟りの対象です。法華経は、悟ることができない人々をも救うこと、すなわち、

私^{わたし}たちすべてが菩薩^{ぼさつ}であり、誰^{だれ}でもが成仏^{じやうぶつ}できることを教^{おし}えるお経^{きやう}です。

では、具体的^{ぐんたいてき}には、どのようして成仏^{じやうぶつ}を目指す^{めざ}のでしょうか。それは、成仏^{じやうぶつ}するための種子^{たね}（仏種子^{ぶつしゆじ}）を植^うえ付けること以外^{いがい}にはないとされました。この修行^{しゆぎやう}を菩薩^{ぼさつ}としての修行^{しゆぎやう}、すなわち、菩薩行^{ぼさつぎやう}といえます。

ですから、お題目^{だいもく}を唱^{とな}えることは、悟^{さと}りを目指す^{めざ}修行^{しゆぎやう}の代替^{だいたい}行為^{こうゐ}ではなく、仏^{ほとけ}になるための菩薩行^{ぼさつぎやう}そのものなのです。

このように、成仏^{じやうぶつ}するための種子^{たね}を表^{あらわ}すお題目^{だいもく}は、宗祖^{しゆそう}の唱^{とな}えられたお題目^{だいもく}であり、それは「ほんもんはつぼんじやうぎやうしよでん^{所伝}の^{南無}なむみよほうれんげき^{法蓮華}よ^経う」以外^{いがい}にはないことは、宗祖^{しゆそう}の御文章^{ごぶんしやう}に明^{あき}らかです。

